聖霊降臨後第１０主日（特定１３）　　パンが増える話　　２０２３．８．６の翌日から.

先週は、からし種とパン種のことが福音書に出てきました。
からし種の方は、イスラエルによく生えている一年草で、けし粒のような小さな種が、２メートルにも３メートルにも成長する。だから種には力がある、ということを教えてくれていました。

しかし、パン種の方は、ただ膨れる、ということだけではなく、パン種には、悪いイメージがユダヤ教の中にあることを、覚えておく必要があります。

ある注解書には面白いことが書かれていました。
『注目すべきことに、ユダヤ教においてパン種は不浄のものとされていた。過越しの祭りにおいて神殿には種なしパンがささげられ、各家庭でもパン種をすっかり取り除いて家を清めた。そのようなパン種をイエスが神の国のたとえに用いるのは、彼がユダヤ教から見ていかがわしいと思われる連中を仲間としていたことと関係があろう。そうした者との交わりが、全体の変革を可能とする。』（新共同訳新約聖書注解）

イエス様のはじめられた教会は、社会でのけ者になった、それこそ毒麦か、ものを腐敗させるイースト菌のような人たちで構成されていました。しかし、家を建てる者の退けた石が、隅の親石になった（詩編１１８・２２）ように、ユダヤ教の異端として発生したイエス様の集団は、社会を変える教会になるんだ、という考えがその中にあったのだろうと推測するのです。

だから、先週のからし種の話とパン種の話は、単に膨れるとか、腐敗するとかという現象ではなく、今までの常識を覆すような、教会には強い力が秘められているのだ、ということをイエス様は言おうとしておられたのではないか、と思うのです。

そういう意味では、今日の、パンが増える奇跡物語は、先週までの、イエス様の話されたたとえ話から発展して、言葉ではなく、行動で体験させ、理解させようとされたお話だということだろうと思います。

ここで、最初に疑問に思うことは、５つのパンと２匹の魚で、男だけで５千人。女性や子どもを入れたら１万人以上の人々でしょう。こんなことが、本当に起こるのか、という疑問が出てきます。

本当にこの通りのことが起ったのなら、世界の飢餓の問題も解決するでしょうが、どうもこれは、少しのパンで大勢の人が養われる、偉大な指導者に付いて回る伝説みたいなものだろうと思います。

今日のマタイによる福音書には出てきませんが、同じパンが増える奇跡物語でも、ヨハネによる福音書では、みんなが満腹して、残ったパン屑が１２の籠にいっぱいになった時、イエス様のことを人々は「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である」と言っています。

これは、イエス様よりも９００年くらい前に活躍していた預言者エリシャのことでしょう。
列王記下４章の終わりに、大麦のパン２０個で百人の人をエリシャが養った話があるからです。

しかし、イスラエルの人々にとって、もっと強烈な印象は、エジプトを出て、荒野で食べるものが無かった時、天からのパンであるマナを人々に食べさせたモーセのことが、印象深く残っていたと思われます。そして、そのモーセが、人々に残した最後の説教と言われる申命記の中で、１８章のおわりあたりですが、神様が、モーセのような預言者が立てられる、ということを言っています。ですから、イエス様が、腹の減った人々を養った話は、モーセやエリシャなどを人々に思い出させたのだろうと思います。

さて、それでは、このパンの増えた奇跡物語で、イエス様は私たちに何を教えようとされたのでしょうか。

今日の話で注目することは、弟子たちとイエス様の会話です。
『15 夕暮れになったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、もう時間もたちました。群衆を解散させてください。そうすれば、自分で村へ食べ物を買いに行くでしょう。」』

弟子たちは、この空腹な状態は、それぞれがパンを買うことによって解決できると思っています。

それに対して、イエス様は別のことを言われました。
『16 イエスは言われた。「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい。」』

買うのではなく、あなた方が与えなさい、というわけです。

「ここにはパン５つと魚２匹しかありません。」と答えています。これを誰が持っていたのか。ヨハネによる福音書では少年が持っていた、ということになっていますが、果たして本当はどうなんでしょうか。

ある人の説教で気づかされたのですが、パン５つと魚２匹、というのは、１３人分の食事だった、ということが紹介されていました。

つまり、イエス様たちが食べるつもりで用意していたものを与えなさい、と促しているのです。
そのあと、どうなったか。ヨハネによる福音書のように、少年たちも夕食ぐらいは用意していたかもしれません。

ところが、弟子たちが、まず自分たちの食事を、そこに広げて、一緒に食べましょう、というので、群衆もそれぞれ、お互いの弁当を分かち合って、野原の晩さん会になった、ということかもしれません。

私は青年たちとフィリピンへ行って、いろんな体験をしたことが、今も心に残っているんですが、その中でも、ちょっと恥ずかしいことがありました。

フィリピンへ行く前に、私は福岡空港でお土産によくお酒を買って行ったのですが、乗り換えて行く場合、手荷物に液体をもっては行けないことになったんです。それで、ボールペンを何本か買って行ったのですが、それをマニラから７００キロも離れたパラワン島に持って行きました。

ところがパラワン島で私たちを迎えてくれた、ラモンという人は素晴らしいプレゼントをくれました。それは彼が自分で作った、手作りの楽器だったのです。

プレゼントは、買って行けばいい、ということではなく、自分たちの生活でできたものを私たちに分かち合ってくれた。その素晴らしい竹の楽器は、今も持っていますが、金で買うのではなく、分かち合う時、作った人の気持ちも伝わってくるような、すばらしいものを感じたのです。

宮崎に来て、ただ自分のためだけに食品を買うのではなく、みんなで分かち合う漬物などを作ることの楽しさ。それをイエス様は教えたかったのではないか（。

その分かち合いが素晴らしかったので、５０００人が満腹した話になったのではないか、と思うのです。

＊今年の８月６日（主イエス命名の日）は、日曜日なので、聖霊降臨後第１０主日（特定１３）の聖書日課や詩編は礼拝では読まれません。しかし、特定１０から続く、種を蒔く人のたとえ、（７月１６日）毒麦のたとえ（２３日）、からし種とパン種の話（３０日）に続く、このパンが増える話は、一連の教えとして私は受け止めていますので、この８月の聖書綴りでは紙面の余裕もあったので、その聖書日課や詩編の解説もこの下に掲載します。

８月７日月曜日から聖餐式を行う場合（特定１３）の日課
特祷　祈祷書２３２頁　　旧約　ネヘミヤ記９：３５～３９　　詩編　７８：１～２９
使徒書　ローマ８：３５～３９　　福音書　マタイ１４：１３～２１　推奨聖歌　243,375,416,508,576

８月７日～　７８編　＊選び

知恵の詩、讃美の歌、感謝の歌の要素の混じった「歴史の詩」。４３～５１節は二次的追加らしい（「彼ら」はその前後と異なり、エジプト人のこと）。荒野の歴史が述べられた後、１２節以下の出エジプトの問題に戻っている。この詩で北イスラエルの長い不信の歴史が描かれ、最後の短いユダの歴史では神の選びのみが語られている。９節は色々に解されるが北イスラエルが神の戦いを始めから放棄したことを非難し、それが６７節で神が北イスラエルを棄てられたことに応じていると解す。１２節「ゾアン」ナイルのデルタにあるタニス。５１節「最初の力の実」は首子のこと。５４節「山」カナン地全体が山地だから。５８節「高い所」カナンの神々の聖所は高い所にあった。６０節「シロ」エレミヤ７：１２，２６：６参照。この詩はイスラエルと対比したユダの叙述が短か過ぎて尻切れとんぼのように見えるが、イスラエルの罪とその処罰を警告としてユダが神の選びにのみ頼るべきことを奨めたものか。

＊アメリカ聖公会の祈祷書を見て気づいたことだが、１９７９年の、現在日本聖公会がそれを元にしている聖書日課では特定１３については上記のとおりだが、２００７年の改訂版では、
（旧約）　ネヘミヤ記　→　創世記３２：２２～３１　あるいは　イザヤ５５：１～５
（詩編）　７８　→　１７：１～７，１６　　あるいは　１４５：８～９，１５～２２
使徒書と福音書は上記と同じでした。現在の日本の祈祷書には詩編が決まっていないので、当時のアメリカの祈祷書を参考にしたのでしょうが、今度の改定ではどうなるのでしょうか。